

斉藤雄平さん

DPI世界会議札幌大会組織委員会事務局
ボランティア・スタッフ

私 が 目 指 す も の

障害のある人も、障害のない人も
共に生きる社会の実現に向けて開かれる
DPI世界会議札幌大会
大会の成功のために少しでも役立てるよう
そして、自分自身のためにも頑張りたい

「ボランティアスタッフ
として働くことができ
て、本当に良かったと
思います」。



DPI (障害者イン

ターナショナル)は、一九八一年に結成された国際組織で、日本を含め百五十八カ国が加盟し、障害者の自立や社会参加の推進を目的とした、さまざまな活動を行っています。DPIでは、四年に一度、福祉・人権・環境などの各分野が抱える課題について、障害者の視点で行動提起をする「DPI世界会議」を開いており、第六回大会は今年十月に札幌で開催されることになっていきます。

その札幌大会の準備に当たる事務局で、ボランティア・スタッフとして奮闘している一人の青年がいます。それが、斉藤雄平さん、二十三歳です。主に郵便物の処理や資料作成などを担当し、時には車いすを使用する職員の外出に同行するなど、いろいろな面で職員をサポートしており、頼りになる存在「事務局次長の横尾浩二さん」と、周囲の人々から厚い信頼を寄せられています。

一方、最初は何も分からないうまま飛び込んだ」と言う斉藤さんも、ボランティア・スタッフとしての三年以上の経験を通じ、DPIや障害者福



昨年11月に行われたブレ大会の様子

祉に関することをはじめ、多くのことを学んだと感じています。「日常生活の中でも、段差や傾斜に自然と目が行くようになって、ここは車いすだと大変だな、そんなことを思うようにもなりましたね」。また、共に働く仲間たちから影響を受け、仕事に対する

責任感や社会人としての倫理観なども少しずつ芽生えてきたと、斉藤さんは語ります。「今はブレ大会で行ったアンケートの集計表を作り直しているところですが、最初に作ったものは分かりづらかったもので、そんな何気ない言葉からも、斉藤さんの仕事に対する誠実な態度とこれまで得た経験の確かさを感じさせます。「ボランティア・スタッフとして働くことができ、本当に良かったと思います」と振り返る斉藤さん。まずは開催の迫った大会の準備に全力を注ぎ、その後も、いろいろなことにチャレンジして、貴重な体験となった今回のボランティア活動のように、自分の人生の糧となるものを見つけていきたいと考えています。



斉藤雄平さん。一つのことに固執せず、多角的に物事を見つめることができるよう、より一層見聞を広めたいと語る